

レター

台湾レポートⅡ 台湾での交流

岡本紀子 松田ひとみ

2011年12月23日より5日間にわたり、中華民国（台湾）の20名の高齢者の皆様、中国医学がご専門の中国医薬大学の医師や看護師と高齢者ケアについての情報交換の機会に恵まれました。交流の場となった中国医薬大学北港付属媽祖医院の玄関に入ると、線香のほのかな香りが立ち込めていました。お線香の香りは医院内に祀られた媽祖様へたむけられたもので、多くの方が媽祖様にお祈りをしておられました。媽祖様は台湾で最も親しまれている神とも言われています。中国医薬大学北港付属医院の近くには、台湾全土に数百の廟があるといわれる媽祖廟の総本山があり、北港の町は媽祖様への信仰が厚い地域でした。

中国医薬大学は、西洋医学と中国医学の発展を目的としており、医学部（西洋医学）、漢方医学部（中国医学）、薬学部、公衆衛生学部、健康看護学部があります。媽祖医院にも中国医学の医師がおり、日本で目にする診療科に並んで鍼灸を用いた外来診療が行われ

ていました。そして、すぐ隣には集中治療室や手術室があるなど、医療の現場において中国医学が一般的なものであると感じました。中国医学の医師のもとには患者さんが列をなしており、医師と患者さんの様子から中国医学に対する信頼の厚さが伝わってきました。

また、薬では漢方薬が多く用いられています。医師に処方された漢方薬の処方箋を漢方専門店に持っていくと、その場で漢方薬が調合されます。専門店には甘草や乾燥したタツノオトシゴなど、100種類ほどの漢方薬が常備されています。漢方薬は処方されるだけでなく、生活に取り入れられています。家庭料理に用いられている他、食後の口腔をすっきりさせる乾燥させたみかんの皮や、疲れ目にはクコの実を食すという習慣があります。大学近くにある漢方専門の料理店には学生が集まり、漢方薬入りのスープを囲んでランチを楽しんでいました。中国医学の伝統は、医療だけでなく暮らしを通して脈々と受け継がれていると感じました。

